



## 侵入生物の分布拡大に関する研究

生物資源科学部 教授 宮永 龍一

国際物流の発展に伴い、本来日本に生息していない生物が海外から侵入するケースが増えています。その中には「ヒアリ」のように健康被害をもたらしたり、「アレチウリ」のように雑草化して農業被害をもたらすものがあります。

私たちの研究室では、花粉の運搬を通して作物の実りや野生植物の繁殖に重要な役割を果たす「ハナバチ」に着目し、その生態について研究を行っています。近年、外来ハナバチの一種である「タイワンタケクマバチ」が日本に侵入し、分布を拡大しています。私たちは2022年に島根県内で初めてその生息を確認しました。

タイワンタケクマバチは枯竹の節間部の空洞に巣を造ります。詳しい侵入の経路は不明ですが、中国大陸南部から輸入された竹製品や竹材に紛れていたのではないかと推測されています。2006年に愛知県と岐阜県で初めて発見されています。

現在のところタイワンタケクマバチが健康被害や農業被害をもたらすといった報告はありません。一方で在来ハナバチ類と競合し、その生息を脅かすなど、生態系の「かく乱」をもたらす可能性は完全に否定できません。私たちは山陰地方での分布の拡大をモニタリングしつつ、生態系への影響を注意深く確認していきたいと考えています。



タイワンタケクマバチのメス



竹に穿たれた巣への出入口